

## ボストン美術館 パリジェンヌ展 時代を映す女性たち

世田谷美術館（東京）2018.01.13～04.01 広島県立美術館 2018.04.11～06.10

「ボストン美術館」は、1870年に地元の有志によって設立された全米有数の規模を有する民間の組織として運営されている美術館で所蔵品50万点という。

本展は、ファッションや生き方が国を超えて憧れの的となってきた「パリの女性たちの魅力」が、如何に作られてきたかを探る企画としての開催である。

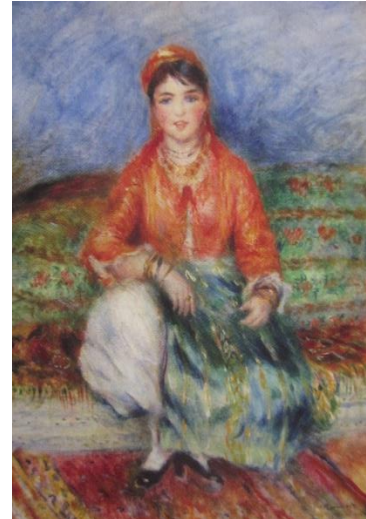
展覧会は、「ボストン美術館」所蔵の多彩な作品「約120点」を通して、18～20世紀の「パリ」を体現する女性たちの姿に迫る企画として、「Ⅰ.パリという舞台」「Ⅱ.日々の生活」「Ⅲ.パリジェンヌの確立」「Ⅳ.芸術をとりまく環境」「Ⅴ.モダン・シーン」の5部から構成されている。



(1)



(2)



(3)

(1) E・マネ 《街の歌い手》1862年頃 左図

70年ぶりの大規模修復後に公開された作品は、居酒屋からギターを持った女性が出たところを描いたもので、これまで鈍いねずみ色だった上着やスカートは、青みがかったシックなグレーに、細いストライプも浮き出て最新流行の装いであることが判明して、筆遣いや衣装の色に居酒屋様子が鮮明になっている。

(1) J・S・サージェント 《チャールズ・E インチズ夫人》1887年

当時のパリで流行したファッションデザイナーを取り入れ、アメリカの女性がパリジェンヌになりきる装いを描いた作品である。

(2) M.S.・カサット 《縞模様のソファーに腰かけて読書するダフィー夫人》1876年 油彩・板

(3) P・O・ルノアール 《エキゾチックな情景のパリジェンヌ？》

1881年 油彩・カンヴァス